

ドクターのヒューマンドキュメント誌

平成13年4月17日第三種郵便物認可 平成28年2月20日（毎月1回20日発行） 通巻197号

No.197 March

# DOCTOR'S MAGAZINE

3  
2016

ドクターズマガジン

## ドクターの肖像

医療法人財団 岩井医療財団 理事長  
岩井整形外科内科病院 理事長  
稲波脊椎・関節病院 理事長・院長

# 稲波 弘彦

## Forte —躍進する病院—

# 石巻赤十字病院

## 時代を支える女性医師

岡山大学病院てんかんセンター  
副センター長

# 吉永 治美



# 世界をめざす 「最小侵襲運動器外科」の名医

ドクターの肖像 196

## 稲波弘彦

医療法人財団 岩井医療財団 理事長  
岩井整形外科内科病院 理事長  
稲波脊椎・関節病院 理事長・院長

聞き手／中村明（(株)メディカル・プリンシプル社 社長）

文／郷好文 撮影／松村琢磨

## グループの脊椎内視鏡手術は 全国件数の1割を占める

「めざすは世界に冠たる最小侵襲運動器外科病院です」

一瞬、面映ゆそうな表情を浮かべたが、謙遜するでもなく背伸びするでもなく、こう言い切った。低侵襲と言わないのは技術への自信。だが「世界に冠たる」とはどのような裏付けがあるのか。日本のトップクラスとはいえ、なぜこんな大スローガンを放てるのか。

それは第一に内視鏡による低侵襲手術の技術と実績である。稲波脊椎・関節病院の稲波弘彦院長の鮮やかな手技の一つにMEL(内視鏡下腰椎弓切除術)がある。患者の背中を18ミリほど切開し内視鏡管を挿入。ノミを振るい椎弓を切除する。鋭匙で両側の肥厚した黄色靭帯を慎重に切除する。ほどなく硬膜の拍動が良くなり、圧迫が取り除かれ、30分ほどで終了。

「学会で発表されているMED(内視鏡下腰椎椎間板摘出術)の平均手術時間は60分以上のところ、私は26分です。MELはそれよりずっと長くかかっているようですね」

その低侵襲性は、固定術の例でも輸血例もなく、副作用である感染症も少ないことで立証されている(東京大学脊椎グループ多施設研究による)。まさに患者の希望する「身体に負担の少ない治療」を叶えているといえる。

この高度な治療を支えるのが、綿密な検査。168スライス撮影がルーティンのMRI。

神経線維を描出するトラクトグラフィ。各種の診断的ブロックや電気生生理学的検査と組み合わせ、病変位置を正確に診断する。

「これらの検査で、病変部分を精密に特定します。それは病巣以外の部位を傷つけず、身体への負担を最小限に抑える手術には必須なのです」

保存的治療が優先できる症例を正しく見極めるためにも、正確な診断が全てのベースという考えが徹底されている。還暦を過ぎても、病態の解明に解剖を行う姿勢に象徴される。

「夜中に真つ暗けの医学部一号館の解剖実習室に行つて、屍体の背中を探っているなんて、ちよつと鬼気迫るでしょう」

同業の医師にも手術見学は常にオープン。見学したある医師は「的確で見極めの早い洗練された内視鏡手術」と稲波氏の手技に感嘆し、別の医師は「入室から帰室まで、体位変換もドレープも全てがスピーディーでスムーズで驚きました」とチームの質を称賛した。

彼が率いる岩井グループ全体の内視鏡手術症例数累計は9000例(稲波氏の執刀数は約3000例以上)を超え、ここ数年は年13000例以上を手術している。日本全体の脊椎内視鏡手術数は年間約1万件なので、1割以上をグループで実施する勘定である。

MEDやMELのほか、PELD(経皮的内視鏡下腰椎椎間板摘出術)、MELIF/TLIF(腰椎椎体間固定術)、XLIF(腰椎側方椎体間固定術)などの症例も多い。まさに脊椎外科の総合パートナーが、独自の低侵襲技術を極める。治療成績を

フィードバックし、治療法の革新を行う。稲波氏を頼って全国から患者が訪れる理由だ。

## 全国から来る患者のために 交通至便の「品川」に開設

岩井病院(後に総合病院)の関連病院として岩井整形外科内科病院が設立されたが、運営は稲波氏が全てゼロから立ち上げた。全国から患者が増え、品川に新設したのが当院だ。

全国区の整形外科病院になったのは技術だけではない。かつて手術が成功しても痛みが引かない患者もいた。なぜかと考え分かったのが心と症状のつながりである。背中や腰の痛みは心も原因であることが分かってきた。「つらかったですね」と言うと、泣かれる患者さんも結構いますね」

“人”を診ることができるようになると、治療成績が格段に上がる。背骨を真っ直ぐにするだけの医療者を超えた。症状に応じ手術を分けるアプローチは低侵襲ならではだが、患者の高齢化まで見据える思いやり故である。

稲波氏の技術・経営・優しさ故に良医も集まる。副院長の内山英司氏はスポーツ整形外科の権威で、前十字靭帯(ACL)再建術では第一人者。米田稔氏は肩の関節鏡下手術で著名な「肩関節のパイオニア」。湯澤洋平氏は最先端の脊椎・関節手術を数多く手掛けてきた。読影にも日本核医学技術学会総会学術大会の優勝スタッフを擁する。保存的治療や手術に関する精緻な説明、術後リハビリまで総合的なサービスで患者満足度を高め、手術症例数

だけでなく患者数トータルも、その満足度も増えている。

## 「医療データは公共財」の潮流を日本で初めて導く

その患者の支持をバックに、手掛けようとしている社会活動がある。

「20年ほど前に経済学者の故宇沢弘文先生に『医療は社会的共通資本である』と言われ、行動価値と保有価値があると考えたのです」

行動価値には医療の自分が受けた提供、逆にいえば自身が受けたくない医療は行わないことを定めた。保有価値は、宇沢氏が「医療がガスや水道と同じ社会共通資本であり、皆で維持して皆で恩恵をこうむるべし」と言った。医療データも「公共財」だ。その考えは世界潮流になろうとしていることを知る。

脊椎内視鏡手術開始当初から画像データを記録し、患者への質問票が現在の評価基準群に完成したのが2012年。ドクターエイドが患者から聞く質問項目は、痛み・症状・問診・メンタルなど11種の臨床評価基準である。動画は8000件、臨床評価は30000件まで蓄積した。

「ノウハウが流失するから止めろという知人もいますが、もっと強くなればいいですから」  
菊地臣一氏（福島県立医科大学学長）、福井次矢氏（聖路加国際病院院長）、川渕孝一氏（東京医科歯科大学大学院教授）、同院に勤務するAndrew G. Ten Have氏（ハーバード大出身）らの協力も得て、東京大学のデータ解析チー



▲東京都臨床整形外科医会の会長に就任（2002年）



▲中国の最小侵襲外科学会で記念講演

◀東大の卒業式で母と



◀NHKスペシャル「腰痛・治療革命」に出演。2015年にアンコールが一番多かった番組

ムやグーグルのスタッフと共に「失敗データ」から欧米に先駆けた活動が始まる。全ての診療情報を個々の患者に提供もしてきた。

「手術動画をDVDで差し上げますと言うと『痛くなりそうだから見ない』と言う患者さんも多いのですが…（笑）」

確かな技術の上に社会視点があり、その背中から社会派ドクターの姿勢が見えた。だが褒めようとするスリリとかわす。

「この白衣Mなんです。Lより細く見えるでしょう?」

社会派の医療経営者にして茶目つ気あり。その眼差しは優しく光っていた。友の言葉に目を開かれ、医師への道を選択し、「二人の父」の願いと叱咤で成長した。医

師を目指す前後の時代から見ていこう。

## 革命が起きても意義がある職 それは医師だった

関西で育ったやんちゃ坊主は、小学校3年生で東京の新宿に引っ越した。現在の高層ビル群がまだ浄水場の時代である。近所の淀橋第六小学校に通いだして、勉学に開眼した。

「4年生になって受験校から和田勗先生が赴任して来られ、『学習部』というのを作られたんです。それから成績が上がりました」

「寄せてよ」と関西弁を口にしては「何言ってるやがんの」とからかわれて喧嘩していた子は、同級生の宿題を作る風変わりな部のおかげで

生まれ変わる。名門麻布中へ進学した後も相変わらず喧嘩ばかりしていたが、そこにはもっと大きな喧嘩があった。学園紛争である。「頭の良いヤツは政治活動をやってました。私は麻布俱樂部に通ってました」

討論会、ロックアウトの学校は素通りして広尾の麻雀店「麻布俱樂部」に入り浸った。

麻雀牌を弾いて将来を持って余っていたある日、活動家の同級生が言った。「革命が起きるかもしれないのに官僚やサラリーマンになるのか?」「じゃあ何がいい」と問い返すと、同級生は「医者だけはどんな体制でも意味がある」と。学園紛争の混乱より混沌とした時代を生きた父の気持ちも分かってきた。

父は幼年学校、士官学校、陸大のコースをたどった生粋の陸軍将校だった。戦後はソ連に抑留。解放後に向かったのが神戸乗馬倶楽部だった。

「父は戦後、馬術を教えていました」

1932年、バロン西(西竹一)の「ウラヌス号」がその馬場で訓練され、ロサンゼルス五輪の会場に向かった。4年後のベルリン五輪には父・稲波弘次氏(騎兵中尉Ⅱ当時)も出場した。大障碍飛越競技と総合馬術である。《障碍の水濠に仕掛けがあり我輩は破れた》

ドイツ軍は国威高揚のため必勝が筋書きで、底が見えない水濠に細工がしてあったという。稲波少年は半信半疑ながら、明治生まれの父が「吾輩は」と語る話をじっと聞く。後にオリンピック記録映画「美の祭典」で父の話の信憑性を知る。混沌とした世相の中で、最も混沌としていたのは日本人の心だった。



▲東京六大学自馬競技大会で優勝、関東学生の総合馬術競技は3位だった。



▲馬術部OB会で、金子光男氏、中村仁氏、宮本修平氏、曾根原滋氏、東純一氏、横井誠一氏と



▲神戸乗馬倶楽部で父に乗せられて



▲東大の卒業式で医学部長の小坂樹徳氏と

「信じていたものが一切無くなった。価値観も180度変わったんじゃないでしょうか」

軽薄で即物的なアメリカに学ぶものはない——戦勝国の価値観に染まれぬ父が、日本の再生を考えて行きついたのが日本人の食生活改善だった。消化吸収の良い食生活から体力を向上しようと食材や機械の研究を重ねた。

「おかげで僕らはオートミールなど不味いものばかり食べさせられました(笑)」

父が書いた論文を読む人がいた。大屋晋三氏である。帝人を世界トップの合織メーカー

に育てた豪腕経営者は、ピンときたら実行する人であった。「社長室で好きなことを書いて」と言われて上京してきたのだった。

混沌から抜け出し、信じるべき唯一のものは健康——父の日本再生への思いと活動が稲波少年に医師となる資質を植え付けていた。

**医師を目指し、2度、東大合格  
理Ⅱを退学して理Ⅲへ**

稲波氏は、東大に2年連続で入学した。



## PROFILE

.....いななみ・ひろひこ

1979年	東京大学医学部 卒業 東京大学医学部整形外科学教室 入局 都立墨東病院・三井記念病院・虎の門病院などに向向
1990年	医療法人財団岩井医療財団 岩井整形外科内科病院 院長
2007年	医療法人財団岩井医療財団 理事長
2015年	岩井医療財団 稲波脊椎・関節病院 理事長・院長

### 認定・資格

日本整形外科学会専門医、日本整形外科学会認定脊椎脊髄病医、日本整形外科学会認定脊椎内視鏡下手術・技術認定医、日本脊椎脊髄病学会指導医、日本医師会スポーツ医、労働衛生コンサルタント

### 役職

整形災害外科学研究助成財団 常務理事、全日本病院協会 理事、東京都病院協会 副会長、東京都医療審議会 委員、NPO法人日本治療的乗馬協会 副理事長、運動器の10年・日本協会 業務執行理事、株式会社ゴールデンスパ・ニューオータニ 取締役

東京大学理科II類に入学して、進振り医学部へと思ったが、あるアクシデントがあり、1年で退学して、再受験して理科III類に合格。「学生課の人が優しくして『合格まで退学届は預かっておきます』と言ってくれたさうだ」

見事に2年連続の合格、いよいよ医師の道です。と混ざると混ざ返してきた。

「運動会(体育会)馬術部卒業です」

東京大学馬術部。育成・調教・馬術を三鷹馬場で学び、関東の馬術選手権や東京六大学戦、全日本学生選手権もある。激しい体育会のイメージはなさそうだと思えば違う。

「キツイです。30人入部しても残ったのは5人。すると二日半に1回臭い厩舎に泊まって馬の世話をするんです」

理IIで入部した時、夏合宿で股関節を痛めて乗馬ができなくなった。ならば医師へ一直線と思ったのが再受験の動機。だが、理III入学後に再入部、4年生まで馬と付き合い合った。

担当馬を持ち、飼料などの役職を与えられる。朝からの日課は馬房の掃除に餌作りから水替え、馬の体調チェック。キュロットと長靴をはいてヘルメットをかぶる。馬にまたがると視線が高くなる。障害を軽々乗り越える愛馬を撫で、優しき目で嘶く。

東京六大学自馬競技大会では障害の部で優勝し、関東学生選手権では総合馬術の部で3位の成績。東大の運動部として、また、忙しい医学部学生としては異例の成績であった。稲波氏は大工仕事好きという手先の器用さから整形を選び、整形外科教室に入局、関連病院に派遣された。まず医療技術を高めた。

## MEDを導入した翌年から 日本最多の症例数

最初に注力したのは手の外科だった。

「指の再建手術で、神経を縫合し血管を吻合し、作業を延々と真夜中までしました」

手の小さい関節再建手術で気付いたことがあった。PIP関節背側脱臼骨折の損傷では整復が難しく、術後に拘縮が起きやすい。可動域を確保しながらリハビリができないか。症例を重ね小さな創外固定器を開発し、成果を投稿(1993年)した。これが骨折部を固定しながら指関節を牽引して動かせる「パングラフ型手指創外固定器」の発明となる。世界標準の骨折治療の教科書『Rockwood and Green's Fractures in Adults』に掲載された。

だが年々手の骨折症例が減少した。技術的にも新しい挑戦が少なくなった。そんな時、同級生が「これからは内視鏡の時代だ」と言うのを聞く。早い回復は患者のためになる。それにはなるべく小さく手術することだった。

2001年12月27日、ヘルニア患者を2人予定して同級生を手術場に招く。内視鏡の手術を見せてもらった後、2例目を自ら執刀。「これなら私にもできると思いました」

マイクロサージェリーで鍛えた腕には内視鏡は難しいものではなかった。脊椎疾患低侵襲手術にMEDを導入した翌年から日本最多の症例数となった。MED-PLIF/TLIFではtubular retractorからcageを挿入する手技を開発した。さらに腰部脊柱管狭



## 行動価値と保有価値を兼ね備えてこそ 存在意義のある病院だと思えます。

窄症の手術でのX L I Fでも内視鏡を導入し、独自の低侵襲手法を編み出した。技術の壁を越えた先には、経営という壁が稲波氏を待ち構えていた。

### 医療にある余白の文化を 義父から継承する

稲波氏にはもうひとり父がいる。

義父の岩井宏方氏である。

「10年は医局にいなさいと言われて、移ったのは10年目でした」

元日本医師会長の故武見太郎氏に私淑し、医療への提言の鋭さで知られた岩井宏方氏は、耳鼻咽喉科医から身を起こして岩井総合病院を設立。経営に聴く、霞が関ビルに健診・診療の総合診療所を、ホテルニューオータニにアスレチック併設の診療所を開く。

「オマエのために病院つくるからと、岩井整形外科内科病院を設立してくれました」

岩井氏は婿の手綱捌きも心得ていた。経営が上達する稲波氏に目を細めて任せ、自身は診療活動から次々と退いた。ライフワークの「高度先進医療研究会」で叡智を集め、現代医療への提言を終生続けた。岩井氏のモットーは、「医療には余白の文化が存在する」である。医療経営は時に余白が役立つ。

余白とは何か。岩井氏が遺した著書には、武見氏との議論や日医・中医協への提言、宇沢氏ら学者や芸術家、企業家との幅広い交流や研究会活動が記されている。目は医療という枠を超え、国の経済や福祉に向かい開いていた。

「人との交流や医療社会について、毎晩のように話をしてもらったのが、かけがえのない財産ですね」

### 「PET導入事件」を契機に 真の経営者に成長する

だが稲波氏が余白を活かせるまでには、大きな障壁があった。岩井整形外科内科病院を拡張し、検診センター「メディチェック画像診断センター」を開設した時だ。病院の応接室で建設会社の営業部長が「そろそろ建設費を払ってくれませんか」と言った。その日、約束をしていた事務長が不在のため、院長をと稲波氏が初めて対峙する。最新鋭機械の他に建設費用が5億円。開所後3ヶ月が過ぎていた。

「画像診断センターの開所式の数日前に、新聞の一面に『PET検査でがんの85%が検出できない』という記事が出たんです。ご丁寧ですぐにまた、後追い記事が出て…(笑)」

それまで「PET数ヶ月待ち」のどの施設でも稼働が急速に悪化。稲波氏の新施設でも1日に16人の皮算用が、フタを開ければ2、3人というありさま。親戚や知人に頼ってようやくコマを埋める日も多かった。

「経理に聞くと『全て事務長がやっていた』と言、金も無い。銀行に電話すると、『事務長は金利が1%高いので別の金融機関とシンジケートを組むと言っていましたよ』と」

稲波氏は銀行に飛んで行く。支店の法人営業部長はやれやれという顔。稲波氏は必死に状況を説明し計画を語った。

部長は稲波氏を射抜くように見つめ、沈黙の後、「やりましょう」とひと言。彼は経営者の資質を見抜き、育てるバンカーであった。支店部長の決裁限度枠を遥かに越えた支援をしてくれた。

追加融資をしてもらおうべく他の銀行を回った。事情を話すと誰もが稲波氏に言った。「なんでPETを導入したんですか？ あなた整形外科医でしょう」

床に向けた顔が火照った。高額診断設備で儲けようとした自分が恥ずかしかった。

事務長が精神的に迫り込まれ失踪したことも分かる。生来の実直さが災いし、さらに稲波氏が事務長に任せきりにしたのも拍車をかけた。「今後は本業に専心しよう。職員を理解しよう」と自分に誓った。

名実共に岩井グループの経営者となった稲波氏は、借入金をわずか2年で返済した。凄いですねと言うと、ひと言返してきた。

「私はほんとに運が良いんです」

稲波氏の言う「運」とは何だろうか。単に「ツイている」「運が良い」というアピールでもなく、ただ運命を受け止める「諦観」でもない。それは「遺伝子」ではないか。

## 二人の父を凌ぐ原動力 それは「ミーム」

新病院に設置した硬膜縫合トレーニングシステム、そして多施設協同研究や会長を務める脊椎外科近未来研究会が後援するCatheter Stainer（新鮮献体による手術訓練）も成果を上げている。

内山副院長は言う。「東大の整形外科奨学会賞を頂いた時、稲波先生も授賞されました。スピーチで、病院で二酸化炭素の排出権を購入したこと、乗馬技術を活かした障がい者治療のことを話され、『民間病院がなぜここまで？』と感銘を受けて入職を決めました」

日本治療的乗馬協会の副理事長も務める。障がい者が馬と親しみ、世話や運動で心や身体を健康を取り戻す取り組みだ。「人と馬の触れ合い」を日本で主導できる医師は少ない。

医療データの蓄積・活用でもさらに先を見る。術後十数年にわたって患者に来院を促し、経過観察・生活情報を蓄積。患者にステークホルダーとしての役割を担ってもらい、仕組み作り、総力戦で医療を改善していく。



▲台北に呼ばれて内視鏡視下の固定手術を行う。台湾での手術は3度目

一連の活動には二人の父を凌ぐ彼独自の原動力がある。それが「ミーム」である。

「行動価値と保有価値の両方を兼ね備える病院こそ、存在意義のある病院だと思います。それが私にとってミームだと思っています」

英国の進化生物学者、リチャード・ドーキンス氏は「生物は遺伝子によって利用される『乗り物』に過ぎない」と言った。文化的進化は「ミーム」という遺伝子で行われ、社会で磨かれて、洗練されて次世代に増殖していく。

つまり稲波氏にとって医療技術も人材も、経営も設備も、それを増殖させるための乗り物なのである。それを授かり、動かせる立場になれたことを運というのだ。

彼の優しく深い眼差しの理由が分かった。新病院は竣工間際まで「東京脊椎・関節病院」とする予定だった。それを「稲波脊椎・関節病院」と変えたのは、稲波グループになる

一歩であり、広く社会に身を捧げる決意だ。「ミームのある病院を作ることが使命です」馬よりも優しい目になる瞬間である。